

## ■特集：公開シンポジウム ー新しい奄美世界の創出(2)ー

## 沖永良部島民の歴史、文化、アイデンティティ

高橋 孝代（法政大学沖縄文化研究所国内研究員）

## I. はじめに

本稿は、2004年11月に沖永良部島和泊町で開催された鹿児島大学全学総合プロジェクト「島嶼圏開発のグランドデザイン」学術公開シンポジウムで発表した内容を軸としている。内容の多くは既に『沖縄文化研究』第29号（2003年）に発表したものである。今回この内容を、沖永良部島で発表したのは初めてであり、調査したことをフィードバックできる絶好の機会をもつことができた。本稿では、その体験と意義も加味し発表を振り返ってみたい。

筆者は沖永良部島民のアイデンティティを研究してきたが、そもそもこの研究に取り組むきっかけとなったのは、沖永良部島出身である筆者自身の体験に由来している。筆者が米国サンフランシスコに留学中の1996年に、ジャパントウン（日本人街）で沖縄系移民100周年祭が行われた。筆者はジャパントウンから程近い場所に住んでおり、祭りの間中流れてくる沖縄の民謡に、「血の騒ぐ」ような懐かしさを感じ、すぐさまジャパントウンに出かけた。沖縄系の人の集まりの中に入り会話をしている中、筆者自身も沖縄出身なのかと聞かれ、筆者は「いえ、奄美の沖永良部島なんです」と答えた。自分には「オキナワン」ではないという自覚があることを改めて確認した。筆者は「なぜオキナワンではないのに沖縄の文化に強い愛着を感じるのか」疑問に思った。そして、他の沖永良部島の人はどうのようなアイデンティティをもつのかという興味が湧きこの研究はスタートした。

沖永良部島は、沖縄島の最北端辺戸岬から

北東に約60キロ、鹿児島市から南西に約540キロの位置にあり、和泊<sup>わどまり</sup>、知名<sup>ちな</sup>の2町からなる人口15,123人（2001年8月現在）の小さな島である。同島は、地理的に沖縄島と日本本土の間にあり、歴史的に両地域からの政治的影響を受けてきた。沖永良部島は14世紀以降の三山時代<sup>1</sup>は北山王の勢力下にあり、15世紀初め三山が統一され王朝が形成された後は琉球王国に属した。1609年の薩摩藩による琉球侵攻後、沖永良部島は薩摩藩直轄領となり薩摩藩より遣わされた役人が島を治め、その一方で中国からの冊封使渡琉の際は琉球王国に対し食料支援を行うなどの関係は継続した。明治期になり代官政治は終わり、沖永良部島は次第に近代県政に組み込まれていった。沖永良部島は明治5（1872）年に鹿児島39大区となり、明治8（1875）年には大島支庁がおかれ、明治12（1879）年に鹿児島県大島郡の一部となった。第二次世界大戦後は沖縄県および他の奄美諸島とともに米軍施政権下におかれた。その後、日本へ「復帰」するため激しい運動を展開し、昭和28（1953）年には昭和20（1945）年から続いた7年10ヶ月間の米軍施政権下の時代に終止符が打たれ、戦前と同様に鹿児島県大島郡に属することとなった。

沖永良部島の「沖縄」と「鹿児島」の行政的、文化的「境界地域」に位置するという地理的環境と双方からの政治支配は島に住む人々にも影響を及ぼしている。例えば、政治支配の時代を反映し、島には沖縄系の人々の子孫や鹿児島系の人々の子孫がおり、多くの場合それらの人々は各々の出自をアイデンティティの拠りどころとしている。沖縄系出

自には「永良部世の主」の子孫を名乗る親族集団が、また鹿児島系出自には「先祖は薩摩の〇〇代官である」と薩摩藩役人の出自を始祖とする親族集団が存在し、家系図を作成するなど、祖先の出自への関心は高い。出自は、人々のアイデンティティを形成する重要な要素になっており、その出自に基づくアイデンティティは沖縄あるいは鹿児島への帰属意識に関連している。

筆者は、沖永良部島が「日本／沖縄」、「鹿児島／沖縄」、「奄美／沖縄」など複数の境界がオーバーラップした境界地域にあると捉えている。本稿では、沖永良部島のもつ「鹿児島／沖縄」の境界性に注目し、政治的な歴史が人々のアイデンティティにどのような影響をおよぼしているのかを考察する。

## II. 政治の歴史と権力構造

### 1. 権力者層の変遷

政治の歴史のなかで島外からの政治勢力、特に沖永良部島の南方に位置する沖縄と、北方に位置する鹿児島からの政治勢力は島の人々のアイデンティティにさまざまな影響を及ぼしている。それらの中で、権力者層の出自に基づくアイデンティティに焦点を当てる。沖縄系出自を名乗る人々の始祖とされる人物は三山時代（14世紀頃）に溯る。「宗」、「要」姓を名乗る親族集団は、以下で説明する「永良部世の主」の子孫を名乗り、アイデンティティの拠りどころとしている。一方、鹿児島系出自をアイデンティティの拠りどころとしているのは、薩摩藩直轄領時代に赴任してきた藩役人を始祖としている場合が多い。

三山時代から琉球王国時代は世の主の子孫が領主となりその後権力は世襲して受け継がれ沖縄系の人々を中心に権力をもった。しかし、薩摩藩の琉球侵攻後、薩摩藩直轄領となった沖永良部島では次第に薩摩系子孫の権力が増していき、現在もその影響が残ってい

る。

### 2. 三山時代(14世紀頃)～琉球王国時代(15, 16世紀)

#### 2-1. 三山時代

沖永良部島が島外から政治的影響を受け始めたのは14世紀以降であった。それまでは各集落に有力者がおり集落をまとめていたと考えられ、現在でもこれらの豪族に関する伝説は数多く伝承されている。沖縄が三山時代であった14世紀頃、沖永良部島は北山(山北)王の勢力下にあった。沖永良部島は、北山王の次男とされる真松千代が領主「世の主」として島を治めた。「永良部世の主」は島の祭職である祝女の姪オキヌルと北山王の間に生まれたとされる。以後、島の統治者としての地位を世襲し、琉球王国時代を経て薩摩藩直轄領時代中期頃まで世の主の子孫を中心とした沖縄系出自の人々が権力の中核を占めた。

永良部世の主に関する文献史料は、薩摩藩直轄領時代であった1706年に薩摩藩による琉球関係の文書や家系図の取り上げ命令<sup>2</sup>によりその多くが焼却処分となったとされ(和泊町編1985:382)、17世紀以前のは少ない。よって、これらの根拠とされる文献史料としては、1711年に薩摩藩の命により沖永良部島の与人(島役人の最高職)3人と与論島の与人2人の連署で藩に提出した「世の主の由来記」と1850年に世の主の子孫と言いつた宗一族の平安統(当時の身分は与人格横目)という人物によって書かれた「世乃主かなし由緒書」がある。また沖縄の万葉集といわれる琉歌集『おもろそうし』<sup>3</sup>には沖永良部島の歌13首中、世の主に関する歌謡が4首ある。

『おもろそうし』の中の永良部世の主を詠んだ歌(訳は外間守善校注『おもろそうし』参照<sup>4</sup>)

- 一 永良部世の主の 選でおちやる 能作  
赤で百読の真絹取てみおやせ  
又 離れ世の主の 選でおちやる (第  
13-116)  
(永良部世の主, 離れ世の主が選んでお  
いた芸事をやる人, 赤頭部の若者たちよ,  
美しい絹を取って, 世の主に奉れ)
- 一 永良部世の主の 御船 橋 しよわち  
へ 永良部島 なちやる  
又 離れ世の主の (第13-190)  
(永良部世の主が, 離れ島の世の主が, お  
船を架け橋に給いて交易をし, 永良部島  
を立派な島に成したことの見事さよ)
- 一 永良部世の主の 選でおちやる 土触  
れ 土触れや 世の主ちよ 待つよる  
又 離れ世の主の 金鞍 掛けて 与  
和泊 降れて (第13-191)  
(永良部世の主が, 離れ島の世の主が選  
んでおいた馬の群れの見事な事よ。馬の  
群れは, 世の主をこそ待っているのだ。  
世の主は馬に美しい金鞍を掛けて, 与和  
泊にお降りになったのだ)
- 一 永良部立つ あす達 大ぐすく げら  
へて げらへ やり 思ひ 子のため  
又 離れ 立つ あす達 大ぐすく  
(第13-114)  
(永良部島に出発する長老たちよ, 大き  
な城を造ってあげなさい, 愛する王子の  
ために)

当時, 永良部世の主の居城は, 沖縄からの連絡船の往来がよく見える内城集落内の小高い丘の上にあり, 内城集落は政治の中心地であった。永良部世の主は中山王の三山統一によって自害したとされ(「世乃主かなし由緒記」(1850), 「世の主由来与人西平調書」(1744年頃<sup>5)</sup>), その年代は1416年頃であるとされる。世の主の墓は内城にあり史跡文化財として鹿児島県より指定されている。また世の主を祭る神社は生まれた場所(下城集落)

と居城跡(内城集落)の二個所に, また世の主の母オキヌルを祭る神社が上城集落にある。永良部世の主に関する伝説は数多く, 沖永良部島の人々に親しみをもって受け止められている。そして, 沖永良部島と沖縄の関係の親密さを表すときには必ずといってよいほど言及される人物である。

## 2-2. 琉球王国時代

沖縄で, 三山時代が終結し中山王によって琉球王国が形成されると, 北山王の支配下であった沖永良部島も琉球王国に組み入れられた。琉球王府より任命される地方官人としての最高職「大屋子」は, 世の主の子孫が継承した。永良部世の主の子孫は居を直城にかまえ首里王府が任命する地方領主の官職「大屋子」を担っていたので「直城大屋」と呼ばれていた。『世乃主かなし由緒書』[1850]には,

… 一 右直城の子孫の上中山王御取立にて代々大屋役仰付相勤来り候由。

依之当分私迄も島中のもの大屋子孫と唱申候。尤大屋役何代相勤申候哉不詳候。…

とあり, 琉球王国時代には永良部世の主の子孫直城大屋は, 中山王のとりたてにより島の最高の官職である大屋子を代々務めた旨が記されている。これらのことは, 薩摩藩直轄領となった時代に書き残された要家(永良部世の主子孫)所蔵文書(後出)によって裏付けすることができる。

さらに, 永良部世の主の子孫が統治者の地位を世襲したことは, 徳之島に存在する文書によっても明らかにされている。永良部世の主の子孫で, 琉球王国時代末期(中世末)の沖永良部島の大屋子は徳之島の大屋子が死去したため, 徳之島大屋子の職を兼任した時期もあった(坂井1933:25)。この件に関しては, 「八十八呉良謝佐栄久由緒記」<sup>6</sup>「徳之島世

の主由緒書（賓満家系図）」<sup>7</sup>、佐家大殿地蔵「雑書由緒記写」<sup>8</sup>に記述がある。これらによると、徳之島大親<sup>9</sup>東ヶ之主という人物が、万暦三十六年（慶長十三年）二月死去し、後役が任命されるまでの間、徳之島大親の職務を執行するため、沖永良部島大親首里之主が派遣されたという。慶長13年は1608年で薩摩藩による琉球侵攻（1609）の前年に当たる。このように、三山時代以後琉球王国時代も世の主の子孫の親族集団に権力が集中したことがうかがえる。

### 3. 藩直轄領時代（近世）

#### 3-1. 前期沖縄系出自の大屋子時代

1609年の薩摩藩の琉球侵攻により、沖永良部島は他の奄美諸島とともに1611年に琉球王国から割譲され薩摩藩直轄領となり、この政治的状況は明治まで続いた。権力者層は琉球王国時代に引き続き永良部世の主の子孫を中心とした縁者が占めた。最高の地方官職である「大屋子」は、沖縄出自の人々が統治者の地位を世襲していた。しかし、次第に鹿児島系の人々によってその地位は取って代わられることになった。

権力構造をみる指標として歴代の与人の出自や出身集落を注意をむけると、藩政時代（近世）中期頃までは、内城集落中心に居住していたソーバラと呼ばれた親族集団（世の主の子孫・宗家）や琉球王国の第二尚氏時代の王家の流れを汲む一族でハナグスクバラと呼ばれた親族集団（豊山家、金城家）など沖縄系出自集団から多くの与人を輩出していた。しかし、次第に薩摩藩役人の子孫である鹿児島系の人々の多くが与人を努めるようになり権力が移行し、文化11（1814）年に内城集落の宗家の祖先「平安統」が与人に就任したのを最後に、以後沖縄系出自から与人に就任することはなかった。内城集落と和泊集落出身者の与人の人数を比較すると、代官所が設置

された1690年から100年後の1790年までは、内城出身者は7人で和泊出身者は9人、その後明治期までは内城出身者は2人、和泊出身者は11人で、沖縄系の人々の勢力の弱まりを示唆している。

沖縄の権力者と親族関係にある永良部世の主、および豊山、金城家の子孫は薩摩藩直轄領時代の前半には、島で最高の官職を世襲した〔永吉1985：171、先田1997：8〕。薩摩藩直轄領になったのち、大屋子の役が琉球王国との関係が強いとして廃止になったが、その後も大屋子に代わる最高の官職「与人」に任命されたことが、要家に伝わる文書すなわち、1613年の知行目録と1697年の家譜より見出すことができる。

要家に所蔵される文書1（1613〔慶長18〕年）、文書2（1697〔元禄10〕年）には系図と以下の記述がある。

#### 文書1

##### 高拾石

右知行之御事於其地別而依被召仕充  
行畢 田坪字有 別紙  
抽御奉公者可有御恩賞之旨 所被仰  
出也 仍目録如件  
伊勢兵部少輔貞昌 印  
三原諸右衛門尉重利 印  
慶長十八年九月廿五日  
永良部之嶋 よひと

#### 文書2

高拾石之目録 伊勢兵部様三原諸右工門  
様御判有 右拝領之先祖直シ城之大屋わ  
らべ名  
次郎かね 女房大あむしられわらべ名  
あめみつかね…  
元禄拾年丁丑五月廿五日  
わらべ名 生城部

### 3-2. 権力者層の移行：藩役人との通婚

薩摩藩直轄領となった後、沖永良部島は徳之島に設置された代官所の管轄下であった。しかし1690年に沖永良部島に代官所が設置され、薩摩藩から派遣された役人が直接島に滞在し統治するようになった。藩役人の滞在が契機となり、島の権力構造にも変化がおこった。これまで、永良部世の主の親類縁者によって権力が集中していたが、各集落の有力者たちが藩役人との通婚による縁戚関係によって社会的地位の流動性が可能になり、次第に権力は鹿児島系の人々に移っていった。

鹿児島系の人々が権力を持つに至った背景には、薩摩藩役人と沖永良部島の女性との通婚による社会関係があった。藩役人との通婚が社会的地位向上のための手段として用いられたのである。薩摩藩からの役人の就退任や主な出来事を記録した「沖永良部島代官記系図」によると、赴任した役人の主な役職と人数は、代官一人、横目一人、附役三人であった。「沖永良部島代官系図」には、1690（元禄3）年から1873（明治6）年までの184年間に93名の代官を含む544人の派遣藩役人の名が記されている。中には数回にわたって任命された藩役人もいた。例えば、大久保次郎右衛門（大久保利通の父）は1827（文政10）年と1837（天保8）年の二度にわたって附役として赴任している。

薩摩藩より派遣された藩役人の役所（詰所）と官舎（仮屋）は薩摩からの船の受け入れ口となった島の東部の港に隣接する場所（現在の和泊集落）に設置された。在任期間は、2年から4年で、ほとんどが単身であった。その間身の回りの世話をする女性が現地妻として官舎に住み、役人とともに丁重に扱われた。藩役人は島の最高権力者としてトンガナシ（お殿様）、現地妻は島の言葉でアングシャリ（姐御様）という尊称で呼ばれた。藩役人と現地妻の子供はトンガナシグウ（お殿様の

子）、特に男児はボウ、女兒はアカと呼ばれ、現地妻およびその子は優遇された。例えば農民に課された夫役<sup>10</sup>（女子13歳から50歳まで、男子15歳以上60歳まで労力の貢をする制度）が免れた（永吉1985:380—381）。また、現地妻は藩役人の世話役として島民からの税で生活し、田畑を買い与えられたため、役人が薩摩へ帰った後も一生の生活を支えることができたと言われる（甲1987:23）。またその子供たちは、武士の子供として優遇され、成長して島役人に取りたてられる場合が多かった。このように、アングシャリになると特権が多いため、「ナナウティグチヌミジクディアングシャリニゲーシュン」（七個所の湧き水の落ち口から浄水を汲んで神に捧げ、アングシャリに取りたてられるように祈願する）という諺もある。

アングシャリはどのようにして選出されたのかに関する史資料は乏しいが、大福謙蔵氏（70歳、昭和7年生）からの聞き取りで興味深い口頭伝承が得られた。大福家は鹿児島系出自と代々言い伝えられており、先祖に藩役人として赴任してきた本田氏のアングシャリになった人物がいたということを誇りとして母親より聞いた話であるという。沖永良部島に、新たに役人が赴任すると各集落の有力者が娘を連れてアングシャリを希望し藩役人のもとに集まった。藩役人は、その中から一人指名し酒を注がせ、それがその女性をアングシャリとして指名した合図とされ、他の人々は去っていくのだという。先祖でそのような容貌に優れた女性がいたということを誇りにした話として、大福は母より何度も繰り返し聞いたという。

藩役人の子供（トンガナシグウ）は、同じ薩摩系の血縁同士で姻戚関係を結ぶ事も多かった。藩役人の子が娘であつたら成人したのち、その後赴任した藩役人の妻になることが多かった。例えば、明治30年から35年の間の戸長（町長、村長の前身）であつた坂本

元明を中心にその関係を図で表すと、図2のようになる。

図2. 坂元元明を中心とした婚姻関係図

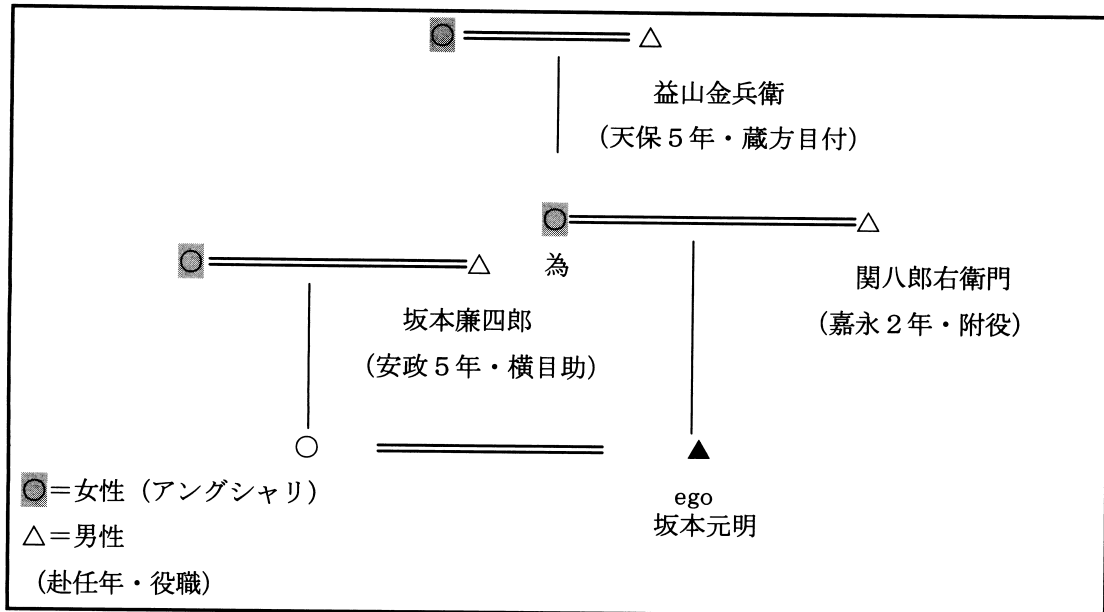


図2に示したように、坂本元明は嘉永5年に附役として島に赴任した関八郎右衛門とアングシャリ「為」の子である。坂本の母「為」は、天保5年に蔵方目付として赴任した益山金兵衛とアングシャリの娘である。また坂本は安政5年に横目助として赴任した坂本廉太郎とアングシャリの娘と婚姻関係を結んでいる。

藩役人とアングシャリとの間に生まれた子には薩摩で教育を受け、後に島の指導者になった人物もいた。例えば、土持正照は、天保2, 6, 9年の3度にわたり沖永良部に藩役人として赴任した土持叶之穂と現地妻「鶴」の子であるが、鹿児島島の正妻に嫡子がなく土持家に引き取られ薩摩の郷中教育を受けた。しかしその後正妻に嫡子が生まれ土持正照は沖永良部にもどった。土持はその後、明治6年に初代戸長となった。

藩役人の子孫は代官所のあった和泊集落を中心に住み定住するようになったので、和泊集落とその隣接集落の手々知名集落には、鹿

児島系の人々が多く住むようになった。そして、藩役人である武士の子孫として優遇され、経済的にも恵まれ、島役人にも取りたてられていくようになり、社会的地位の高い階層を形成するようになった。これらの人々は島の言葉でシュータと呼ばれ、鹿児島系出自の人々を中心とする社会集団を形成した。

「シュー」は、当時一般の人々が上層の人々に対する尊称で、「タ」は複数を表す。これらの人々は、島役人になることが多いことから、官公職に就いている人も指す言葉に転化した。現在でも和泊、知名役場に勤めている人をさしてシュータという言葉が用いられることもある。

島の住民で特に藩役人を補佐しその活躍が目覚しい親族には<sup>じかた</sup>地方武士に準ずる地位「郷士格」が与えられた。近世後期には5親族が郷士格を与えられたが、その親族はほとんどが薩摩藩役人と現地妻の子孫であった。これらの人々は、薩摩の武士と区別をするため二字姓は認められず、琉球式に一字姓を名乗る

ことのみが許された。よって、郷土格を与えられた親族集団は、先祖となる藩役人の姓から一字をとる場合が多く、町、土、山、市、竜の姓を名乗った。例えば、「土持」であれば「土」というようにである。その後明治になり、姓を名乗ることが義務付けられた後は先祖と同じ姓に改姓している場合が多い。和泊集落、手々知名集落の中には、このような郷土格の親族を含む「武士の子孫」の集落、シュータジマ（シュータの集落）として、他集落にたいして優越意識をもつ人もいた。他の集落の人々はサトチュ（里人）と呼び、シュータジマに対し、「田舎（在、郷）の百姓」という意味でそのように呼び差異化した。薩摩藩役人の子孫で和泊集落出身であった安藤佳翠は、「ワドマイ、アカタジの沿革とワドマイシュータの消長」（1953）で「…そして（和泊、手々知名は）共通の優越感を持っていた。『自分たちはシュータジマのものである』ことをもって任じ、同時に『他のシマの者はサトチュ（里人）だ』としていた」[安藤1953]と記している。ただし、かつての政治の中心地であった内城集落に対しては「グスクシュータ」と呼び敬意を示し、サトチュ（里人）扱いにはしなかったという。また、社会の上層部の発展の一方では、砂糖政策による重税などにより、税を払いきれず裕福な農家などの奉公人（ヤトウイ）となっていく人も増えていった。奉公人同士の間にも生まれた子供はヒダワシと呼ばれ、一生、奉公する家の所有する労働力として使役された。近世の沖永良部島ではこのように社会内部の階層化が進み、その中で和泊集落、手々知名集落のシュータは沖永良部島社会の上層に位置した。

#### 4. 近代から現代へ

明治維新後、沖永良部島は近代国家になった日本に鹿児島県の一部として組み込まれることになる。1690年から設置され184年間

存在した藩の役所は明治8年に廃止された。島の役人の最高の官職であった与人は戸長と改正された。全島は3地域に区分されそれぞれの区域の長を戸長としたが、戸長も多くの場合シュータから選出された。藩役人の子孫は近世から夫役を免れ経済的にも恵まれ、知識層となり指導的役割を担った。島嶼町村制が布かれるまで知名村を含め全島の行政は和泊集落と手々知名集落のシュータによって運営されていたといえる。

しかし、島嶼町村制が施行された明治41年以降は次第にシュータ以外の人々が少しずつ島の役人に抜擢されるようになった。行政単位は村単位となり沖永良部島は和泊村、知名村に二分された。知名村の出身者が知名村の村長となったのは1914（大正3）年、四代目村長に就任した新納直定が初めてであった。

そして、シュータによる権力の集中に対する挑戦もあった。それは、大正9年皆川集落の皆川恵三、中山福富たちによる分村事件の例で明らかである。この事件は、皆川、古里、大城、玉城の4集落による和泊村からの分村を希望するもので、その理由として、「1. 村費の負担が皆川、古里、大城、玉城の集落は村の平均額に比較して過重である」、「2. 和泊の一部有志なる者が専横である」が挙げられている [安藤1953]。結果的に分村は認められなかったが、分村を主張した皆川恵三は、その後昭和10年に和泊村長に就任した。和泊、手々知名集落のシュータ以外で政治のトップの座に就いた初めての人物であった。

近世にはさまざまな特権があり、上層を占めていたシュータも、島内で次第にその権勢を失っていった。シュータの中には鹿児島島に移住する家族も多く、人数が減少していった。また、和泊集落は港に近い島外からの移住先にもなり、また商店が集中する生活に便利な集落として他の集落の人が移住し始め、さまざまな人が住む地域となった。そのため「和泊・手々知名集落＝シュータジマ」とい

う意識は次第に薄れていった。また明治以降、地租改正、教育の普及などにより社会層は徐々に平準化され、多くの人々が能力に応じ社会的上昇が可能になった。その手段が、本土で高い教育を受けることで教員や医師などになることであった。町長や教育長、文化協会長などの指導的地位は、小・中学校などの教育機関を定年退職した元教育者たちの定年退職後のポストとなるが多かった。しかしながら、シュータの権力が消滅したわけではなく、現在でも社会階層の大まかな序列は、近世の「遺物」として残存する。

#### IV. 考察—現在にみるアイデンティティへの影響—

##### 1. 出自によるアイデンティティ

これまで、歴史における権力層に焦点を当てその変遷を捉えてきた。政治の歴史が現在の沖永良部島の人々のアイデンティティにどのような影響を与えているのか、質問紙調査資料やインタビューデータをまじえ考察してみる。沖永良部島は、沖縄と鹿児島に位置し、政治の中心から勢力拡大のための対象となった。その政治の影響の副産物として、沖縄系、鹿児島系の権力者層の子孫が存在している。祖先崇拜に支えられながら、現在でも彼らの先祖の出自は基本的なアイデンティティの拠りどころとなっている。社会的なアイデンティティは、他の要素とも複合的に関係しており、祖先の出自が帰属意識を決定す

る全てではないが大きな要因の一つである。例えば、永良部世の主の子孫を名乗る宗家では、世の主神社の神官を代々一族の中から選出し、永良部世の主を大切に祀っている。そして、この出自集団にとって、永良部世の主と自分たちを結ぶ家譜や縁の品々は大切に保管され彼らの心の拠りどころとなっている。また、藩役人の子孫で近世末には郷土格を与えられていた町田家には、祖先である藩役人ゆかりの樹齢約300年の福木があり、アイデンティティ・シンボルとして大切にされている。

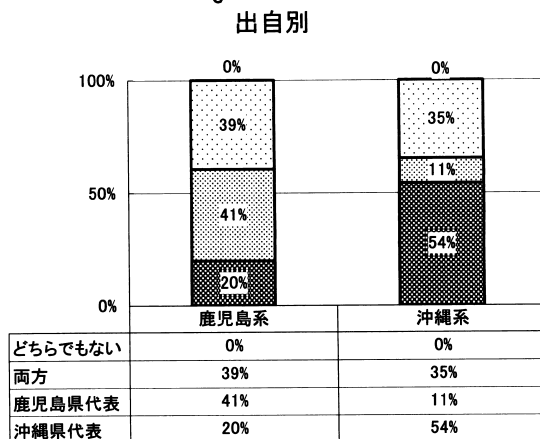
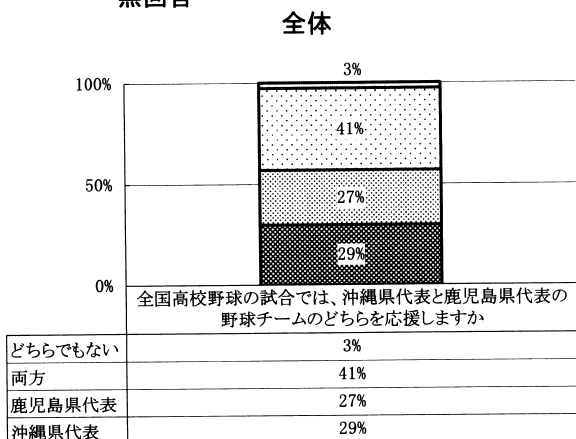
筆者が行った質問紙調査にも、出自が沖縄、鹿児島への感情的愛着や親近感の一例として表れている(質問紙調査資料1参照)。例えば、「全国高校野球の試合では、沖縄県代表と鹿児島県代表の野球チームのどちらを応援しますか」という問いに、回答者600人全体の集計結果では、「沖縄県代表」と答えた人が29.3%、「鹿児島県代表」が32.6%、「両方」が38.0%、「どちらでもない」が0%であった。出自別のクロス集計をしてみると、沖縄系出自を示した人の53.8%が「沖縄県代表」と答え、11.5%が「鹿児島県代表」、「両方」と答えた人が34.6%であった。一方、鹿児島系出自を示した人の中で、40.9%が「鹿児島県代表」、19.7%が「沖縄県代表」、39.4%の人が「両方」と答えている。このように沖縄系出自の人は沖縄を、鹿児島系出自の人は鹿児島を応援する傾向にある。



質問紙調査資料 1

問 23 全国高校野球の試合では、沖縄県代表と鹿児島県代表の野球チームのどちらを応援しますか？

	実数	%
1 沖縄県代表	176	29%
2 鹿児島県代表	163	27%
3 両方	242	41%
4 どちらでもない	16	3%
無回答	3	



さらに、沖永良部島には、「鹿児島／沖縄」の境界性を反映し祖先が沖縄系と鹿児島系の両方の出自を持つ人も少なくない。このようなケースの人は、どちらにもはっきりとは峻別されない融合的なアイデンティティをもっているが、状況によってはどちらかが顕在化する場合もあるようである。例えば、Aさん（70歳・1932 [昭和7] 年生）は自己の出自によるアイデンティティに関連し、以下のよう

…鹿児島意識は僕は少ないほう、かな。  
 …ところが家には系図があるんだけれど、それにはA家というのは鹿児島、ぼくから7代前だから、今からいうと10代前になるわけだけど、それには鹿児島の大福家からきたという風に、兄貴のところにはきれいに書いてあるんですよ。薩摩の役人で。だけど、それに対して今度は、僕のおばあさんはメエクマからきてるわけよ。メエクマ<sup>11</sup>の人はどこまでもあれは沖縄で本土とは関係ないと言っているわけよ。どこまでも与人で琉球と言っているわけね。だからぼく

の親父のほうからいくと鹿児島と縁があったというし、家のばあさんのところからいくとメエクマだからむしろは沖縄、というし。しかし、そういう風にお袋や親父から物語として聞いているもんだからね、どっちかなと思っているわけ。しかしB家のこともあるしね。そういうわけで、鹿児島、という意識は一般の人より薄いんじゃないかなあと思うんですよね。だからといって沖縄…かといわれるとそれもちよっと抵抗あるし。…琉球サミットのときは僕も一生懸命やってさ、絶対気になるわけよ。

今帰仁城、世の主のお父さんのところ、エラブ研究会でいってきて、だから向こうも大変気になるわけね。うーん、どっちかというところぼくは、中間からどっちのほうに、エラブ全体から考えたら、ぼくはどっちを、鹿児島をたくさん向いているのか沖縄をたくさん向いているのか…、うーん、ちょっと、自分ではわかりにくい。…だから、だいたいそういう一であってさ、僕の感じがどうかと言うと、その日によって揺れるからさ。（2002年9月2日実施のイ

インタビューデータより直接引用)

## 2. 地域的アイデンティティ：集落、町

親族を中心に構成され、所有する農地と結びついている集落は、沖永良部島社会において基本となる社会単位である。例えば、沖永良部の人同士で相手のことを知らない場合は、まず「ウラダヌヨー」(あなたはどこの人?)と聞かれるが、それは「どこの集落の人か」を問う質問である。

和泊、手々知名集落の人々の集落に基づくアイデンティティは、シュータジマとしてのアイデンティティであり、それは同時に他の集落に対する優越感を含んでいた。そして、明治以降に島が和泊(村・町)、知名(村・町)の二つの行政区に区分されたのちは、和泊町民と知名町民の町民としてのアイデンティティが形成されていった。和泊町は和泊、手々知名のシュータジマを中心地として発展し、シュータたちが政治、行政の中心を占めた。そして、大正初期まで和泊村のみならず知名村の村長も和泊、手々知名のシュータが担い、政治、行政の実権を握っていたこともあり、和泊が知名に対して優越意識をもつようになった。

町制が施行されたのも和泊町が1941(昭和16)年、知名町が1946(昭和21)年と和泊町が知名町より5年早い。また、島外からの玄関口である空港、港、そして鹿児島県からの出先機関である鹿児島県警沖永良部警察署や鹿児島県大島合同庁舎などを和泊町に設置した。和泊町は知名町より社会的に「上位」であり、「進んでいる」という感覚をもつ人が多く存在していることは、人々の会話からもしばしば読み取れる。

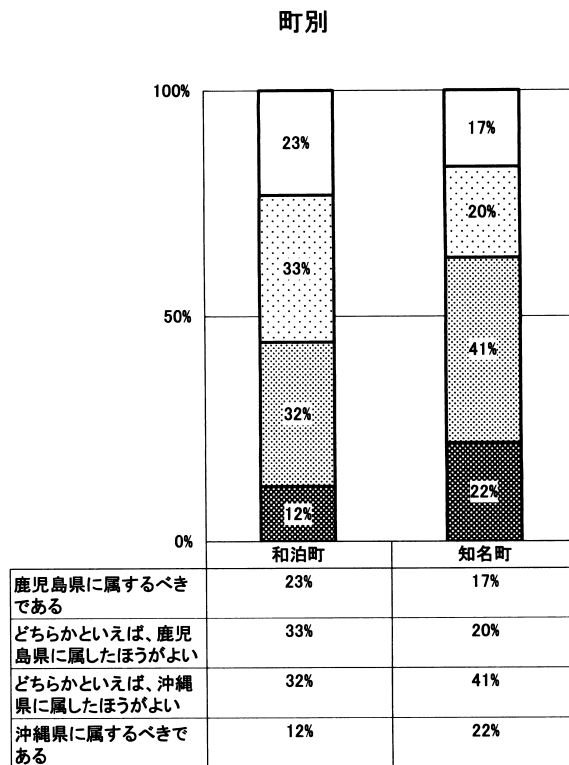
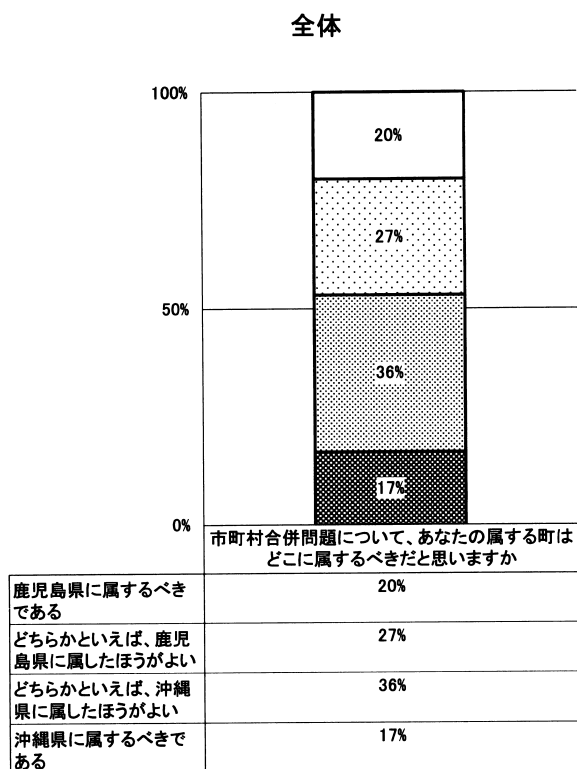
和泊町は、薩摩藩の子孫である鹿児島系の人々が多く住み、184年間、薩摩藩の役所が存在した和泊集落を中心としている。その和泊町には、概して鹿児島に帰属意識を強くもつ人が知名町より多いということがいえる。行政的に沖永良部島が属している鹿児島は、もっとも身近な本土として目標とされてきた。そのため、鹿児島に対し政治的に良い感情をもっている。鹿児島系の人々が明治以降も政治の中心に位置し、彼らの志向が政策を通して町民全体に影響を及ぼしたことは容易に想像できる。

明治以降に特徴的になった近代化の度合いを指標にした町民アイデンティティは、和泊町の人が知名町へ、知名町の人が和泊町へと婚姻後の居住は女性が男性の集落へと移動する傾向が強いの<sup>12</sup>、それほど顕著ではないが、それでも筆者が行った質問紙調査結果にも微妙に差異が表れている。概して和泊町には鹿児島に帰属意識をもつ人が、知名町には沖縄に帰属意識をもつ人が多いといえる。筆者が行った質問紙調査の質問項目の一つである「市町村合併問題についてあなたの属する町はどこに属するべきだと思いますか?」という問い<sup>13</sup>に、(1. 沖縄県に属するべきである、2. どちらかといえば沖縄県に属したほうがよい)と沖縄よりの帰属意識を示す回答をした人は、和泊町には44.2%、知名町には62.6%存在した(質問紙調査資料2参照)。また(3. どちらかといえば鹿児島に属したほうがよい、4. 鹿児島に属するべきである)と、鹿児島よりの帰属意識を示す回答をした人は、和泊町は、55.8%で、知名町は37.3%であった。

質問紙調査資料 2

問 24 市町村合併問題について、あなたの属する町(和泊町あるいは知名町)はどこに属すべきだと思いますか？

	実数	%
1 沖縄県に属すべきである	97	17%
2 どちらかといえば、沖縄県に属したほうがよい	209	36%
3 どちらかといえば、鹿児島県に属したほうがよい	154	27%
4 鹿児島県に属すべきである	115	20%
無回答	25	



V. 結

本稿では、沖永良部島のもつ「鹿児島／沖縄」の境界性に注目し、政治の歴史が人々のアイデンティティに与えた影響を考察した。「鹿児島／沖縄」の境界性は、沖永良部島を取り巻く「薩摩／琉球」の権力のせめぎあいという大きな政治の歴史と深く関連していた。その歴史の産物の一つとして、現在は鹿児島県と沖縄県の境界が沖縄島と与論島の間で引かれている。だが、政治の歴史が残したものは行政の境界だけではなかった。沖永良部島という一つの島の歴史の中にも痕跡を残し、人々のアイデンティティに影響を及ぼしてい

た。

多くの場合、様々な要因が複雑に絡み合い、人々は沖縄と鹿児島の両方に属しているようで完全にはどちらにも属していないようなアンビバレントな感情を併せ持っているといえよう。そしてそれは、「鹿児島／沖縄」の境界を状況に応じて行き来するという境界地域の人々に特徴的な「ボーダー・アイデンティティ」といえる。

今回のシンポジウムの意義を鑑み、沖永良部島の歴史、文化、アイデンティティを奄美諸島内で比較してみると、沖永良部島の特徴といえることは、同島は歴史的に外部からの力に対して反発するのではなく、上手く取り

込んできた点にあると筆者は考える。沖永良部島は小さな島で人口も少なく、外部の大きな力に対して抵抗しても損こそあっても徳は少ないと考えた指導者達が、外部との関係を上手く運んで沖永良部島を「守る」策をとっていたのではないかと筆者は推測する。沖永良部島は琉球王国への服属も早く、薩摩藩直轄領地となった後でも、島の娘との通婚が奨励されるなど、他の島でみられるような権力への反乱の歴史が極めて少ない。幻の島唄アンマメグアの歌詞には、1609年に薩摩藩が沖永良部に上陸した際、島の指導者達が上手くとりなし血を流さずに平穏に和睦をしたという歴史が唄いこまれている。さらに、沖永良部島同様に代官所が設置されていた奄美大島や徳之島でも島妻はいたが、これらの島では島妻になるのを避けるために若い女性を山に逃がしたと言われ、また藩役人の妻になるのを避けるために他の島に逃げた美貌の女性を唄った島唄もあるほどである。他方、沖永良部島には、ヨーチイレーなど藩役人を称えた唄が残っている。沖永良部島と奄美大島、徳之島では藩役人との通婚の社会的意味づけが異なっていたようである。沖永良部島では、島の有力者達が娘の通婚を通じて藩役人と親密な関係を作り、島を守るために便宜を図ってもらったのではないだろうか。藩役人と島妻の子供の存在も大きく、代官所に赴任していた薩摩武士が薩摩に戻った後も、自分の子供のいる島に対して圧政を強いるのはしのびないと思うであろうことも、考えた上での策ではないかと推測する。沖永良部島にはいわゆる「サトウキビ政策」が北三島に比べ遅く、近世末になってからで、経済的搾取の期間も短い。その理由に関しては、既に議論されているが、表面下で沖永良部島の指導者たちの陰の働きかけの可能性はなかったのだろうか。

現在沖永良部島は、鹿児島県下でも裕福な島として知られ、社会的にも経済的にも安定した社会といえる。歴史的にみて、先人達は、

沖永良部島の将来の為に、逆境も巧みに切り抜けてきたが、その方向の特徴としては、争いを避け、被害を最小限度に抑えてきた点にあり、その外部勢力に対する柔軟な姿勢が今日の発展に大きく貢献しているのではないかと筆者は考えるのである。

最後に、今回のシンポジウムの発表で、島の人々の「エラブ」に対する興味の強さを改めて確認した。それは取りも直さず、島民がエラブの人間であることの意味を常に探しているからであるし、また「エラブンチュ」としてのアイデンティティを求めていることでもある。そして、筆者もその追求に対する筆者なりの考えを、一人のエラブンチュとして「エラブ」で発表できたことを、他のどこで発表することよりも意味深いことと考える。

#### 注

<sup>1</sup> 琉球王国成立以前の時代。沖縄島北部中部南部を中心に力をもつ按司(豪族)が存在し、山北(北山)、中山、山南(南山)と称し王を名乗る存在であった。沖永良部島は沖縄島北部の今帰仁城を拠点とした北山(三北)王の勢力下にあり王の息子真松千代は領主「世の主」として島を治めたとされる。

<sup>2</sup> 1706(宝永3)年12月20日に、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島の4島に対して藩庁が発した系図取り上げの命が「大島政典録」に記されている。

<sup>3</sup> 『おもろさうし』は、12世紀ごろから17世紀初頭にわたって謡われた、奄美、沖縄の島々の古謡ウムイを、首里王附が16世紀から17世紀にかけて再録し、編集した歌謡集で、1554首のおもろがおさめられている。古事記、万葉集、祝詞をあわせたものにあたる沖縄最大の古典でもある。おもろはウムイ(思い)が語形変化したものである(外間1986:127)。

<sup>4</sup> ただし、最後の歌の訳は、先田光演『沖永良部島の世之主伝説』(1997:31)がより適訳と考え先田の訳を参照。

<sup>5</sup> 文書に年代が記されていないが、1744年頃の与

人に仁志平という人物がおり、当調書の与人西平と同一人物と考えられる。

<sup>6</sup> 『徳之島郷土研究会報』第2号に掲載されている。

<sup>7</sup> 和泊町誌には「徳之島世之主由緒記」、先田光演『沖永良部島の世之主伝説－資料と解説－』には「賓満家系図」として掲載されているが同一文書。また『奄美大島諸家系譜集』亀井勝信編に記録されている。

<sup>8</sup> 『奄美郷土研究会報』第20号に掲載されている。

<sup>9</sup> 大親とは大屋子と同義の官職名である。

<sup>10</sup> 永吉によると、「共有地を配当された農民はすべて夫役といって、男子15歳から60歳まで、女子13歳から50歳までの者は皆労力の貢をする制であった。夫役に従事する者を作用夫または現用夫といい、兵役、輪卒をはじめ、池溝、道路、などの修繕造営から田畑の復旧、祖先貢の運搬、藩吏巡回の際の労役はもとより、俸給の一部として吏員の使用にまで使役された。したがって農民は一年の過半はこの夫役に従い、自己の農作に入念する日数は極めて僅少であった」（永吉1985：380）とされる。

<sup>11</sup> 和集落の前（すずめ）家の屋号。和集落のメータイ（地域）は大福家と前家の親族集団からなり通婚も盛んで、ほとんどが縁戚関係にある。

<sup>12</sup> 集落内婚が奨励されていた1950年代までとは異なり、集落はもちろん町外、島外の結婚により特に女性の移動が活発になった。

<sup>13</sup> ただし、質問紙調査の行った時期は、市町村合併問題が十分議論されていない段階であったことを考慮しなくてはならない。2002年1月ごろから本格的議論が行政主導で始まり、研究会などが発足した。現在は、沖永良部、与論を一町へ統合するか否かが検討されており、現実的に沖縄へ属するというオプションはない。

## 引用文献及び参考文献

太田好信

1998 『トランスポジションの思想』、京都：世界思想社。

2001 『民族誌的近代への介入』、京都：

人文書院。

甲東哲

1995 『海と稲と巫女は語る』、鹿児島：ノア企画制作。

1987 『島のことば－沖永良部島－』、鹿児島：三笠出版。

金明美

2000 「日本におけるエスニシティ論の再検討：バウンダリー論を中心として」『民族学研究』65（1）、78－93。

先田光演

1990 『沖永良部島の歴史』、自家出版。

1997 『沖永良部島の世之主伝説－資料と解説－』、自家出版。

スチュアート ヘンリ

2002 『民族幻想論』、大阪：解放出版社。

スチュアート・ホール

2001 「誰がアイデンティティを必要とするのか？」『カルチュラルアイデンティティの諸問題－誰がアイデンティティを必要とするのか？』スチュアート・ホール&ポール・ドウ・ゲイ編、宇波彰他訳、東京：大村書店、7－35。

スチュアート・ホール&ポール・ドウ・ゲイ編

2001 『カルチュラルアイデンティティの諸問題－誰がアイデンティティを必要とするのか？』宇波彰他訳、東京：大村書店。

高橋孝代

2001 「沖永良部島における〔沖縄〕芸能文化の受容と背景」『民俗芸能研究』33、東京：民俗芸能学会、44－77。

2002 a 「沖永良部島の芸能と沖縄－アイデンティティを探して－1－5」『沖縄タイムス』1月9日、10日、11日、15日、16日、那覇：沖

- 縄タイムス社.
- 2002b 「奄美・沖永良部島の踊り神」  
『南島研究』43, 東京:南島研究会, 9-20.
- 2002c 「沖永良部島民のアイデンティティと芸能 - エイサーの意味 -」  
『文化人類学研究』3, 東京:早稲田大学文化人類学会, 166-188.
- 高良倉吉
- 1993 『琉球王国』, 東京:岩波書店.
- 1987 『琉球王国の構造』, 東京:吉川弘文館
- 知名町編
- 1982 『知名町誌』, 鹿児島:知名町役場.
- 床呂郁也
- 2002 「越境」『文化人類学最新術後100』綾部恒雄編, 東京:弘文堂, 32-33.
- 永吉毅
- 1985 「中世」『和泊町誌 - 歴史編』和泊町編, 鹿児島:和泊町役場, 127-204.
- 星野命
- 1985 「民族的帰属意識 - エスニックアイデンティティの任意性」『文化人類学2特集民族とエスニシティ』, 京都:アカデミア出版.
- 松井健
- 1989 『琉球のニューエスノグラフィ』, 京都:人文書院.
- 我妻洋
- 1994 「アイデンティティ」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 東京:弘文堂, 2-3.
- 和泊町編
- 1985 『和泊町誌 - 歴史編』, 鹿児島:和泊町教育委員会. 和泊町編
- 1956 『沖永良部島郷土史資料』, 鹿児島:和泊町役場.
- 文書およびその他の文献資料
- 安藤佳翠 1951 「アドマイ, アカタジの沿革とワドマイシュータの消長」
- 衛藤助治 1914 「沖永良部誌」記録書  
「沖永良部島代官系図」記録書  
『おもろさうし』外間守善校注 岩波書店  
要家所蔵文書 (家譜, 知行目録)  
金城家所蔵文書 (家譜, 文書)  
「徳之島世の主由緒書 (賓満家系図)」  
「雑書由緒記写」  
「八十八呉良謝佐栄久由緒記」  
「世乃主かなし由緒記」1850  
「世の主の由来記」1711  
「世の主由来与人西平調書」1744
- 英文参考文献
- Anzaldua, Gloria
- 1987 Borderlands/La Frontera: The New Mestiza, San Francisco: Spinter/Auntlute
- Barth, Fredrik
- 1969 Ethnic groups and Boundaries: The Social Organization of Cultural Diferences, Boston: Little Brown and Company.
- Baschi, Linda, Nina G. Schiller and Cristina S. Blanc
- 1994 Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation-States.  
Langhorne:Gorden and Breach Publishers
- Bhabha, Homi
- 1994 The Location of Culture. New York: Routledge
- Cohen, A
- 1974 "Introduction: The Lesson of

- esnicity". In Urban Ethnicity.  
Abner Cohen (ed.), pp. ix-xxiv,  
London : Tavistock.
- Erikson, Erik Honburger
- 1950 Childhood and Society. New  
York : W.W. Norton&Company,  
INC.
- 1958 Young Man Luther. New York  
: W.W. Norton&Company, INC.
- 1959 Identity and the Life Cycle :  
selected paper. New York :  
International University Press
- 1968 Identity:Youth and Crisis. New  
York : W.W.Norton&Company,  
INC.
- Henderson, Mae G editor
- 1995 Borders, Boundaries, and  
Frames : Essays In Cultural  
Criticism and Cultural Studies,  
New York : Routledge.
- Isaacs, H. R.
- 1975 "Basic Group identity : the  
idols of the tribe". In Ethnicity :  
Theory and Experience. N.  
Glazer and D. P. Moynihan  
(eds.),pp29-52.Harverd  
University Press.
- Takahashi, Takayo
- 1997 "Ethnic Identity of Okinoerabu  
Islanders", San Francisco :  
Master's Thesis submitted to  
San Francisco State Univrsity.